

高大連携を視野に入れた大学公開講座の位置づけと 課題 : 東北大学開放講座を受講した高校生モニタ ーの意識調査から

著者	北村 勝朗, 萩原 敏朗, 泉山 靖人, 齊藤 茂, 千葉 宏毅, 永山 貴洋
雑誌名	教育情報学研究
号	2
ページ	81-89
発行年	2004-03
URL	http://hdl.handle.net/10097/40956

高大連携を視野に入れた大学公開講座の位置づけと課題 ～東北大学開放講座を受講した高校生モニターの意識調査から～

北村 勝朗*, 萩原 敏朗*, 泉山 靖人*, 齊藤 茂**, 千葉 宏毅**, 永山 貴洋**

* 東北大学大学院教育情報学研究部

** 東北大学大学院教育情報学教育部博士課程前期

要旨：本稿の目的は、東北大学開放講座をモニターとして受講した高校生を対象とした調査結果をもとに、高大連携の視点から大学公開講座の在り方を捉えなおすことにある。調査は2003年1月から2月にかけて実施された東北大学開放講座2講座（5回の講義で1講座構成、計10講座）の高校生モニター受講生6名を対象とし、受講動機や受講内容に関し、質問紙調査と20分程度のインタビューを併用し毎回の講座後に実施した。インタビューは、半構造的、自由回答的、深層的インタビューにより実施した。分析の結果、受講した高校生が公開講座を通じて体験した内容は、「学びの志向」、及び「実体験」の2つのカテゴリーに分類され、高等学校における学びから一歩踏み込んだ形での学びの場が、高校生のより深い学びに対する姿勢を掘り起こす役割を果たしている点が明らかにされた。本調査結果から、大学教育開放の今後の在り方に対し、高大連携を視野に入れた開放講座デザインを展開していく必要性が提言された。

キーワード：大学公開講座、高校生モニター、高大連携、定性的分析

I. はじめに

近年、大学等の高等教育機関の地域貢献の重要性が指摘されている。その背景として、1) 生涯学習が広く国民に定着してきたこと、2) 生涯学習のニーズとして、より高度な内容が志向されつつあること、及び3) 大学そのものの存在意義が問い直されていること、等があげられる(佐藤、1998; 関口、2002)。実際に全国45の生涯教育系センターによる大学教育公開講座は、1年間で1500講座程開講され、数多くの受講生に支持されており、国民の大学教育公開講座に寄せる期待は大きいと考えられる1)。こうした公開講座も、時代の変化と共に、その存在意義を変化させつつある。その大きな理由として、国民の生涯学習に求める内容、方法が多様化していることがあげられる。すなわち、従来型の知識伝達的な、啓蒙的な公開講座から、相互交流が可能な実習・演習形式の公開講座、あるいは高等学校との連携を視野に入れた公開講座といった新しい形の公開講座が求められているのである。

そうした中、中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」(平成11年12

月16日)において、「高等学校の生徒が大学レベルの教育を履修する機会の拡大方策」等が提言され、高等学校と大学との連携をはかる、いわゆる高大連携の動きが活発化している。この答申の第4章「初等中等教育と高等学校との接続の改善のための連携のあり方」の中では、「高校生が個々の能力・適正、意欲・関心に基づいて具体的な進路選択を行うことができるよう、高大連携の取り組みを積極的に進めるべきだ」との見解が示されており、こうした答申を受け、各大学は高校生に向けた大学公開講座の在り方を積極的に模索し始めている。

こうした流れの背景には、前述した大学公開講座の再構築と同時に、高等学校の多様化、大学生の基礎学力格差の拡大、入試の変化、及び受験生のモチベーションの変化などが存在している。例えば、総合学科設置校の増加や単位制高校の増加により多様な学習暦をもった大学入学者の増加、AO入試等の新しい入試の形態、大学での勉学意欲の低下等が指摘されている。こうした状況を受け、高等学校の側からは、高校生が大学の授業に触れることにより高校教育の枠を超えた幅広い学習を提供し、知的刺激

を与えることにより、進学動機を明確にし、勉学への取り組みに高い目標をもたせることが期待されている。一方の大学側では、高校生に大学での学びを理解し興味をもってもらうことで、志願者の増加や明確な目的を持った学生の確保といった期待や、高校生のニーズを把握することにより大学の授業をより魅力的なものへと改善していく手がかりを得るといった効果が期待されている。

本稿では、こうした高大連携を視野に入れた大学教育公開講座の在り方について、実際に東北大学開放講座をモニターとして受講した高校生6名を対象とし、高校生の受講意識の分析から捉えてみたい。

II. 方法

1. 対象者

2003年1月から2月にかけて開講された東北大学開放講座、「教育と情報技術」(5回構成)、及び「こころを科学する」(5回構成)の2講座、計10講義をそれぞれ高校生モニターとして受講した6名(1年男子生徒2名、3年女子生徒4名)が調査対象とされた。調査対象者には、あらかじめ調査の趣旨と手続き等について説明が行われ、対象者全員から調査への協力が得られた。

表1：対象者のプロフィール

対象者	年齢(歳)	学年(年)	インタビュー実施日
A	18	3	2003年1月21日～2月25日
B	17	3	2003年1月16日～2月13日
C	18	3	2003年1月16日～2月13日
D	18	3	2003年1月16日～2月13日
E	16	1	2003年1月16日～2月13日
F	16	1	2003年1月16日～2月13日

2. 調査方法

調査は、1対1あるいは1対2の深層的・自由回答的インタビュー(in-depth open-ended interview)による定性的(qualitative)データ収集・分析、及び質問紙調査による定量的(quantitative)

データ収集・分析による多角的調査法(triangulation)によって行った。方法論的な妥当性及び信頼性について次の4点があげられる。第1に、対象者の公開講座受講に対する認識の詳細を描写するためには、講義を通して体験したどのような事実がどのように認識されたのかについて深く掘り下げた定性的な情報が重要となる。この点において深層的・自由回答的インタビューの方法論的妥当性が認められる。第2にインタビューを半構造的(semi-structured)調査面接によって実施することにより、複数名の対象者への調査面接内容の均質化をはかることでデータ収集の信頼性が得られたと考えられる。質問項目に関しては、調査面接に先立ち、ポイントを絞り込み、基幹的な質問項目(main question)、及び回答内容の詳細を確認し発展させる質問項目(probe and follow up question)を設定し、原則的にその質問に沿った形で調査面接が進められた。第3にデータ分析の信頼性に関しては、調査面接データを複数の研究者間で共有し、数回に渡るディスカッションを通して分析を行い分析結果の一致を確認することにより、その信頼性を確保することが可能となった。

3. 手続き

2003年1月から2月にかけて仙台市中央市民センターにおいて午後6時15分から午後8時15分までの2時間、週1回ずつ開講された東北大学開放講座の2講座(各講座5講義構成、計10講義)を対象とし、仙台市内の10高校に開放講座受講モニターの募集を行った。6名の高校生からモニターとしての受講申し込みがあり、この6名を対象として調査が実施された。

2003年1月21日から2001年2月13日までの開放講座開講期間に調査が行われた。インタビュー調査に先立ち、初回の講座受講後に、対象者の大学開放講座との関わり意識に関する予備調査を目的とし、高等学校生活や公開講座受講動機等に関する質問紙調査を実施した。その回答をもとに、各回の公開講座終了後、会場においてインタビュー調査を実施した。

各回のインタビューは、講義内容、講義等に関する感想や意見等について20分から30分にわたるインタビューが行われ、その内容は全て録音された。会話データは調査面接後にテキスト化(トランスクリ

イブ) され、作成された一覧性のデータから発話の意味の分析が行われた。分析はCôté等(1993)による定性的データ分析法に基づき、複数の研究協力者によるディスカッションを通して階層的カテゴリーへ整理された。

Ⅲ. 結果及び考察

1. 質問紙調査結果

図1～3は、質問紙による調査結果をまとめたものである。図1は今回の公開講座の受講理由についての質問(複数回答可)の回答について示している。受講理由の中で多く見られたものは、興味深いテーマ(92.5%)、大学の講義への関心(87.5%)、高校での授業以上の知識獲得(70%)といった学びへの積極的関心を示すもの、及び高校の先生に勧められた(70%)といった現在の学びの環境による働きかけ

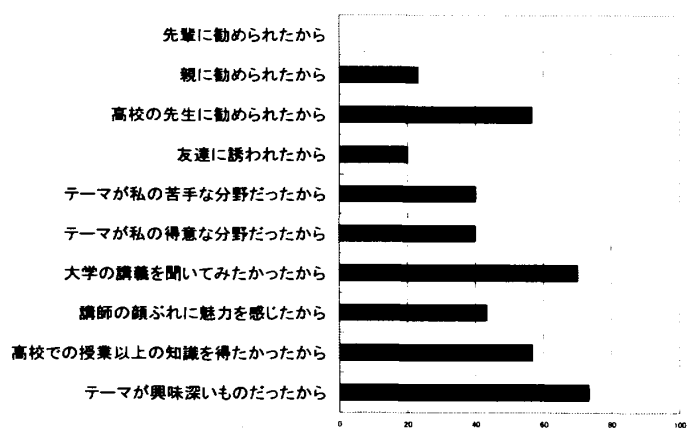


図1: 受講理由

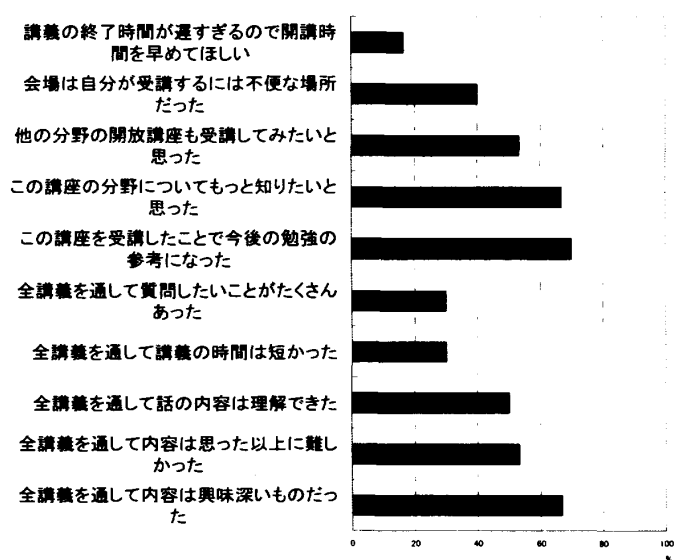


図2: 受講後の感想

であった。その他、講座のテーマに対する自身の得意不得意の評価(50%)、講師への関心(55%)といった理由もあげられている。親、友人、及び先輩からの勧め(30%、25%、0%)等はそれほど積極的な理由としては回答されていない。

図2は、受講した感想についての全体的な質問(複数回答可)の回答について示している。今後の勉強への参考(87.5%)、興味深い(82.5%)、もっと知りたい(82.5%)、他の分野の講座への受講意欲(67.5%)といった受講して学んだ経験に対する積極的な評価が多く見られた。また、思った以上に難しい(67.5%)、あるいは会場の不便さ(50%)といった課題も示されている。

図3は、今後の公開講座への期待についての質問(複数回答可)の回答について示している。要望の中で最も多く示されたものは、継続的な受講への要望(87.5%)であった。また、多様な領域の公開講座受講の要望(67.5%)や、高校の授業では触れない専門的な内容の講義への要望(70%)、大学と同じ内容の講義への要望(62.5%)といった、より深い学びへの関心の高さが示されている。また、公開講座の開講形態に関して、高校への出前講座の要望(67.5%)のように公開講座を高校での学びに引き寄せる要望と同時に、大学の講義室での受講希望(67.5%)、及び、大学の施設を使用した学習体験の要望(75%)といった、大学その場における学びの体験への要望も高く示されている。

次にこうした質問紙調査の回答により深く立ち入った、対象者の意識について、インタビュー調査による結果をもとにみていきたい。

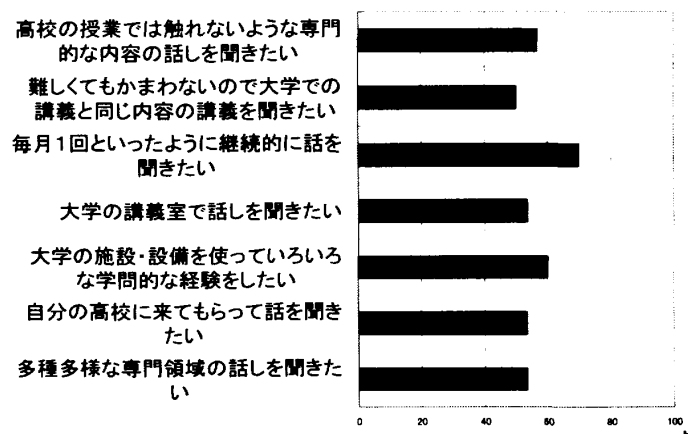


図3: 開放講座に期待すること

2. インタビュー結果

テキスト化されたインタビュー・トランスクリプト・データから128のミーニングユニット^{注1}が得られ、その中から最終的に86のミーニングユニットが本研究における分析対象とされた。これらのミーニングユニットは、「求める成果」と「環境設定」の2つのサブカテゴリーから構成される「学びの志向」のカテゴリー、及び「講義内容」と「講義方法」の2つのサブカテゴリーによって構成される「実体験」のカテゴリーに分類された。表2は、分析によって得られたカテゴリー構成の全体を示したものである。

以下、対象者による発話データをたどりながら、各カテゴリーの主要な要素毎に整理していくことにする。

表1：対象者のプロフィール

カテゴリー	サブカテゴリー	主要な要因
学びの志向	求める成果	専門的知識の獲得 実践的知識の獲得 幅広い教養の獲得 大学の学びの先行体験
	環境設定	高校のニーズ 時間設定 会場設定
実体験	講義内容	驚き 興味の喚起 理解の深化
	講義方法	わかりやすさ 難しさ

1. 学びの志向

このカテゴリーは、(1)求める成果、及び(2)環境設定の2つのサブカテゴリーからなり、対象者の公開講座に対する期待や要望といった公開講座を通した学びへの志向性を説明する大カテゴリーとして作成された。

(1) 求める成果

全ての対象者が、知識や教養の獲得を目指して公開講座を受講している。「専門的知識の獲得」、「実践的知識の獲得」、「幅広い教養の獲得」、及び「大学の学びの先行体験」が主要な要素としてあげられ

る。

「専門的知識の獲得」についてある対象者は次のように述べている。

「この講座を通じて、高校では受けることのできない専門的な知識を身につけたいと思います」。(高3女子)

また、別の対象者は次のように述べている。

「高校の授業ではここまで専門的なものはありませんね。すごく興味があるんです」。(高3女子)

これらの言及から、対象者たちは高校の授業内容から更に深く立ち入った専門性への学びの志向をもっている点が見えてくる。

こうした専門的な知識の志向と同時に、実践的な知識も志向されている。ある対象者は次のように述べている。

「身近なこと、実際に生活や社会で役立つような知識を得たいと思います」。(高3女子)

また別の対象者は開講テーマに触れて次のように述べている。

「生活に密着したものがいいですね。食生活とか、遺伝子やりハビリなんかもいいかもしれませんね」。(高3女子)

自身が抱えている問題解決の手がかりを求める次のような言及もみられた。

「自分の体験のこと、自分に当てはまることについていろいろ考えながら聞きたいと思っています」。(高3女子)

「心理的なことで困った時にどのように対処すればいいのか参考にしたいと思っています」。(高3女子)

これらの言及から、対象者は実践的で具体的な問

題解決の手がかりを求める志向性もまた公開講座に対する思いとして所持している点がみてとれる。

更に、「幅広い教養の獲得」といった志向も存在する。この点がについて、ある対象者は次のように述べている。

「自分の視野を広げたかったので受講しました」。
(高3女子)

また、別の対象者は次のように述べている。

「いろいろなことを学んでみたいし、いろいろな領域のおもしろい話を聞いてみたいと思います。高校の授業では聞けないこともたくさんあるでしょうから」。(高1男子)

これらの言及から、専門性、実践性と同時に幅広く視野を広げるといった志向性もまた公開講座を受講する成果として期待している点がうかがえる。

こうした知識といった成果とは別に、学びの体験あるいは雰囲気味わうといった期待も存在している。この点について何名かの対象者は次のように述べている。

「大学生になる前に、大学の雰囲気を味わっておきたいんです。いい経験だと思いますよ」。
(高3女子)

「その大学で学ぶことが大学を卒業した時にちゃんと使えるものなのかも見てみたいんです」。
(高3女子)

「大学生がどういうふうに授業を受けているのか、高校生のうちに見ておきたいと思います」。
(高3女子)

これらの言及から、高校の段階から大学での学びの具体的な様子や大学を卒業した後への学びの成果の連続性に対して高い関心が寄せられている点が見てとれる。

次に、こうした公開講座の学びの成果を支える部

分としての環境設定についての志向についてみていきたい。

(2) 環境設定

公開講座に寄せる成果を支える部分としての環境設定に関して様々な要望が寄せられている。「高校のニーズ」、「時間設定」、及び「会場設定」が主要な要素としてあげられる。

「高校のニーズ」に関し、学校側及び生徒側それぞれのニーズに触れて対象者は次のように述べている。

「推薦で既に進路が決まっている生徒に先生が勧めてくれました。大学での勉強の準備として、そして動機づけとしての意味で良い機会だと」。(高3女子)

一方、生徒側のニーズに触れてある対象者は次のように述べている。

「高校ではすごくニーズがあると思います。興味深いので是非やっていただけたらと思います」。
(高3女子)

「時間設定」について、ある対象者は開講時間に触れて次のように述べている。

「高校生にはちょうどよい時間ですね。ただ部活をやっていると夕方の時間は厳しいかもしれません」。(高3女子)

また、講義時間に触れてある対象者は次のように述べている。

「学校の授業に比べれば長いので途中で飽きるのではないかと考えていたけれど、とってもわかりやすい内容で退屈することなく、最後まで聞くことができました」。(高1男子)

しかし、2時間連続の講義に対する戸惑いもうかがえた。ある対象者はこの点について次のように述べている。

「2時間続けての授業はきついで、途中で休憩をはさんでほしいですね」。(高3女子)

これらの言及から、開講時間に関しては部活動との関わりを視野に入れた時間設定が必要である点、及び講義時間に関する若干の工夫が必要である点がかがえる。

「会場設定」に関して、広さ、場所、設備等に触れて対象者たちは次のように述べている。

「会場が広くて前が見にくかったです。階段教室なんかを使うと見やすくなるんじゃないですか」。(高3女子)

「駅の近くでいろいろな人に利用しやすい場所なんだと思いますが、私にはちょっと不便な場所でした」。(高3女子)

「スライドだけでなく、黒板も使った方が印象に残るかもしれませんね。特に専門用語とかの説明は黒板の方がいいかもしれませんね」。(高3女子)

これらの言及から、設置会場に関しても対象者の利便性を視野に入れた会場の設定や、講義で利用する施設の工夫が必要である点がかがえる。

以上、「志向」のカテゴリーについてその詳細を各サブカテゴリーの要素にそってみてきた。次に、対象者の高校生たちが実際に公開講座を受講した意識内容について、「体験」のカテゴリーに焦点を当ててみていきたい。

2. 実体験

このカテゴリーは、(1)講義内容、及び(2)講義方法の2つのサブカテゴリーからなり、実際に公開講座を受講して得た体験の詳細について説明するカテゴリーとして作成された。

(1) 講義内容

公開講座の受講を通して得た様々な体験について、対象者たちは、新しい知見に触れた驚きや知的好奇心を満たされた喜びについて語っている。ここでは「驚き」、「興味の喚起」、及び「理解の深化」が主要な要素としてあげられる。

対象者たちはこの「驚き」の体験について次のように述べている。

「人為的に快感を操作できると知り、驚いた」。(高3女子)

「ストレスと病気にはここまで深い関わりがあるというのは驚きました」。(高3女子)

「酒とストレスと肝臓病という項目は驚きでした」。(高3女子)

これらの言及から、対象者たちは公開講座を受講する中で新しい知識情報に触れ、新鮮な驚きを体験している点がかがえる。

また、「興味の喚起」について、対象者たちは次のように述べている。

「自分でも本を読み専門的な知識を増やしていきたいと思いました」。(高3女子)

「わからなかったところは自分でも調べたいと思います。すぐ興味をひかれたからそうしたいと思うんです」。(高3女子)

また、ある対象者は、より広い領域に向けての興味を掘り起こされた体験について次のように述べている。

「この講座を受講して、いろいろなことに興味が出てきたかな」。(高3女子)

また、ある対象者は、ある特定の内容に関してひかれた興味について、次のように述べている。

「心の実験みたいなもの、マウスでやって結果が出ること、ねずみに音を聞かせて、といったことが興味深かったですね」。(高1男子)

また、公開講座を受講したことにより、テーマに関する自身の理解がより深まった点を、多くの対象者が報告している。この点についてある対象者は次のように述べている。

「自分の理解は間違っていたみたいです。医師の力は知識だけではなく、人間性が必要であると改めて感じました」。(高3女子)

またある対象者は学問領域の奥の深さへの自身の理解について次のように述べている。

「きょうの講座で、伝達を行う物質があると聞いて神経系の奥の深さを思い知らされました」。(高1男子)

このように、公開講座を通じて対象者たちはより専門性の高い学問内容に触れることで、自身の知的好奇心を刺激され、あるいは満たされ、更により深くより広い学びへと引き付けられて行く体験を得ている。

次に、公開講座の講義方法に対する対象者の認識についてみていきたい。

(2) 講義方法

公開講座の講義を受講した率直な感想の中で、講義のやり方に関して言及したものも多くみられた。それ等は「わかりやすさ」と「難しさ」の両側面から言及されている。

ある対象者は、「わかりやすさ」について、講義教材の提示方法に触れ次のように述べている。

「スライドでの説明は図がきれいでイメージがわくからいいですね」。(高3女子)

同様に、別の対象者は次のように述べている。

「内容がわかりやすくスライドも見やすくてよかったです」。(高1男子)

また、講師による説明の仕方に触れて、多くの対象者が次のように述べている。

「分かりやすい説明で理解しやすかったです」。(高3女子)

「話の進め方がよかったので、先生の主張を理

解できてすんなり受け入れることができてよかったです」。(高3女子)

これらの言及から、スライドを用いてわかりやすく説明していく講師の講義方法に対して肯定的な評価がなされている点がうかがえる。

しかし、その一方で、講義の方法についての要望もいくつか出されている。講義の中で用いられる専門用語の理解が難しい点について、多くの対象者が次のように述べている。

「用語が専門的過ぎて難しく感じました」。(高1男子)

「専門用語の説明をスライドの中に書いてくれればいいなと思いました」。(高1男子)

また多くの対象者は配布資料に触れて次のように述べている。

「スライドできちんと見るできない部分があったので、できればプリントしてほしいと感じました」。(高3女子)

「先生の話聞きながら何か見られるものがほしいです。配布資料とか」。(高3女子)

また、講義内容の展開の早さについて、ある対象者は次のように述べている。

「内容は興味深かったんですけど、時間の関係からか、全体的に少し話の進め方が早かったので、ついていけないところがありました」。(高3女子)

これらの言及から、興味をもって意欲的に講義に取り組む一方で、専門用語や内容の専門性により、十分に理解する上で難しさを認識している点がうかがえる。

以上、公開講座に対する高校生の受講意識及び受講体験について、質問紙による調査結果及びインタビューによる会話分析結果を手がかりにみてきた。次に、こうした高校生の意識を視野に入れながら、

大学の公開講座の今後の課題について整理したい。

V. まとめと課題

本稿では、2003年1月～2月に実施された東北大学開放講座を高校生モニターとして受講した高校生6名を対象として実施した受講意識についての質問紙及びインタビュー調査結果に基づき、受講動機、受講体験といった公開講座に対する意識を分析することにより、高大連携を視野に入れた公開講座の在り方について検討を行った。

本研究の結果及び今後の課題は下記のようにまとめられる。

1. 公開講座をモニターとして受講した高校生が大学の公開講座に期待していることとして、より深い専門的知識の獲得、より広い教養の獲得、より実践的な知識技能の獲得、及び大学の学びの体験があげられる。
2. 講義内容の難易度は、高校生1年生においても理解可能な範囲であると言える。ただし、専門用語についての説明については意識して講義を進める必要が認められる。
3. 開講時間や会場等に関しては、受講する高校生の学校生活や居住地域といった条件によって評価が異なる。
4. 大学生活の実際に近い形で公開講座を受講する要望が多く見られた。すなわち、大学の講義室や実験室を利用した会場設定の要望、及び継続的な公開講座の受講への要望があげられている。その背景には、高校の段階から大学での学びの具体的な様子や、大学を卒業した後への学びの成果の連続性に対して高い関心がもたれている対象者たちの意識が存在している。
5. 高校生を対象とした公開講座の意義として、大学の研究・教育成果を広く地域に開放する意義と同時に、特定の領域に高い関心を示す高校生

への情報提供やより円滑な大学生活への接続を可能にする機会提供といった意義も認められる。更には、高校生に自大学の教育内容を予め評価してもらうことで、志望学生の獲得や講義内容・方法の改善情報の獲得といった意義も認められる。

6. 今後公開講座をより積極的に展開していくために、公開講座の履修が高等学校における正規の学習活動として単位認定の対象となる制度の整備、及び大学入学後に大学の履修単位として認定の対象となる制度の整備が求められる。
7. 複数の大学の連携により、多様な専門分野に触れる機会を増やしていくことで、高校生がより活用しやすい公開講座の制度化を進めることが求められる。
8. 今後の公開講座のあり方を検討していく上で、より多くの高校生を対象とした調査、及び公開講座の講師を対象とした調査が課題としてあげられる。

参考文献

1. Côté, J., Salmela, J.H., Abderrahim, B., & Russell, S.J., Organizing and Interpreting Unstructured Qualitative Data. *The Sport Psychologist*, 7, 127-137, 1993.
2. 中央教育審議会, 初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申), 1999年12月16日.
3. 佐藤一子, 生涯学習と社会参加. 東京大学出版会, 1998.
4. 関口礼子他, 新しい時代の生涯学習. 有斐閣, 2002.

謝辞

本稿の対象である東北大学公開講座に関わった高校生の皆さん及び講師の先生方に深く感謝の意を表したい。

University Extension Program and its Structure: A qualitative investigation of high school students on the joint educational program

**Katsuro Kitamura *, Toshiro Hagihara *, Yasuto Izumiyama *,
Shigeru Saito **, Hiroki Chiba **, Takahiro Nagayama ****

** Graduate School of Educational Informatics, Research Division, Tohoku University*

*** Graduate School of Educational Informatics, Education Division, Tohoku University*

The purpose of this study was to describe an in-depth description of an attitude toward the University course of high school students. Six high school students served as participants for this study. In-depth open-ended interviews were used to gather data from six students. The inductive analysis process resulted in regrouping these interview transcripts into two categories, orientation toward learning, and experiences of learning, which show a significant agreement between students' perceptions on how they involved themselves in committing their learning experiences and how the experience evolve motivational development. Results showed that University Extension Program develop high school students' attitude toward learning in a manner that maximizes their motivations. Results also indicated that the joint educational program was very effective, and efforts in this line should be contributed by the university staff in various faculties and departments.

Key words: University Extension Program, high school students, joint educational program